



## 提出期限のない宿題

昨日、学校に第33回全国中学生人権作文コンテスト入賞作文集が送られてきました。本コンテストは、法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会が人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として昭和56年度から実施しているものです。その作文集の最初に掲載されている、審査委員長の落合恵子さんが書かれた講評に目がとまりました。紙面の都合上、その一部を紹介します。

かくも瑞々しくも豊かな人権に対する意識と姿勢を持った中学生が「ここ」にいる！それを伝えてくれたことに、私たち大人はまず、それぞれの「あなた」に心から感謝したい。そしてお願いしたい。いま、「あなた」が素手でしっかりと握りしめている人権意識という心の鏡を、決して曇らせることなく、ヒビを入れることなく、より磨き、成長させていっていただきたい、と。

「あなた」が気づいておられるように、社会にはたくさんの差別や偏見がある。ひとりの人間の中に、差別する側という「加害性」と、される側という「被害性」が存在する場合もある。

人権について、時々わたしは次のような言葉に言いかえることがある。人権とは、誰の「足」も踏まないこと。同時に誰にも何にも自分の「足」を踏ませないこと。その約束と実行である、と。むろんこの場合の「足」とは、現実のそれではなく、その人の存在そのもの、尊厳と言い換えることも可能である。

今年も素晴らしい作品に出会えたことを、何よりも嬉しく思う。毎年考えることなのだが、それぞれの「あなた」の作品をより深く読み、受け入れ、心に刻まなくてはならないのは、むしろ私たち大人、あるいは大人社会そのものであるだろう。

たくさんの差別とその構造をつくり、再生産・再助長させてきたのは、多くの場合、大人自身であり、大人が構成員たる社会そのものであるのだから。大人社会のその歪んだ意識に疑問を抱くことなく、知らぬ間に身に付けてしまった若い人たちや子どもが歪んだ意識を学び、習い、受け入れてしまい、社会はそのまま続いていく……。なんと残酷で悲惨なことであるだろう。

人権をテーマにささやかながら活動してきたひとりの大人として、胸が張り裂けそうになる。そして、人権意識が「意識」レベルでとどまることなく、社会の隅々まで行き渡るように活動し続けることを、ここに改めて「あなた」と約束したい。

そして、裏面には、内閣総理大臣賞を受賞した生徒の作文を掲載しました。「とても真っ直ぐで、心に響く作品である」と、落合さんが最大の評価を与えた作品です。

中学生たちは、学年末テストに向け、そして入試に向け、最後の勉強に頑張っています。私たち大人も、子どもたちの傍らで、この「提出期限のない宿題」に取り組んでみませんか。

### 校内研究授業 ～道徳編～

2月17日、本年度最後の校内研究授業として、2つの学級で道徳の授業がありました。本校における「提出期限のない宿題」への取組の一つであるとも言えます。

1年2組（前田馨子先生）は、「“先輩になる”ってどういうことだろう」というテーマについて、自分の部活や間もなく“先輩”になることの意味などについてしっかり考えました。2年1組（岡原秀和先生）

は、『足袋の季節』という資料を使って、人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて生きることのすばらしさについて考えました。どちらの授業も班活動を取り入れながら、活発な意見交換ができていました。



## それでも僕は桃を買う

夏休みのある日、僕は、家族と一緒に旅行することになり、一路、新潟を目指して車に乗っていた。朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食いたい」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで」と反論する。すると、母親は「だってこの桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついているかもしれないからね」と説き伏せたのだ。しゅしゅ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は心の中に何か引っかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな」と言い、母も「確かに心配であるね」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じようなことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっているのに、何となく不安だったからだ。サービスエリアの出来事に引っかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。

しかし、僕の頭から「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなにもその言葉が気になるのか、僕は旅行中ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学5年生の時に言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学5年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いは止まらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。「黙れ、中国人」。

僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さった。そして、自分はみんなと違うんだと切なくなった。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくて仕方がなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放った言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなって耳の奥に残っていた。

その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことも知りもしないのにバカにされ、福島の桃は、放射性物質のことをあまり知らないのに危ないと決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはっきり感じた。

だから、僕は桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見を持ち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思ったからだ。

21世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病気、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本になるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分から遠ざけようとする。その気持ちが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私たちは警戒心を持たず、この世界から差別や偏見をなくすることができるのだろうか。その鍵は、2つあると僕は考える。1つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この2つが、未知のものへの警戒心を取り去ってくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすることは本当に難しいかもしれない。けれども、2つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力を持ち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきっと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。